

オランダにおける宗教学と民族学 「アニミズム」に現れる差異

著者	相澤 里沙
雑誌名	論集
巻	34
発行年	2007-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130272

オランダにおける宗教学と民族学

——「アニミズム」に表れる差異——

相 澤 里 沙

はじめに

現代インドネシアにおいて、宗教といえば公認宗教 agama のことを指す。それ以外の信仰は、「アニミズム」という言葉で表されることがあり、それは「遅れた・劣った文明」という意味や、「共産党」といったニュアンスが含まれる蔑称である。特にスハルト体制下で、共産党および無神論が否定されたことにより、公認宗教に属していないということになれば、共産党の残党であるかのようなレッテルを張られ、弾圧を受けることになった。

アニミズムといえば、1871年にイギリスの人類学者 E・B・タイラー (Tylor, Edward Burnett, 1832-1917) によって、宗教の最小定義として提唱された術語であるが [Tylor, (1871) 1994], 学者のみならず、植民地で働く行政官や宣教師などによって、現地の宗教を表すのに盛んに用いられた。それは、誕生したイギリスのみならず、特にオランダにおける宗教学や民族学に影響を及ぼすことになる。

当時インドネシアの宗主国であったオランダでは、植民地統治のためには現地の宗教や慣習法を知ることが必要不可欠であると考えられていた。それゆえその研究に余念がなく、現地での観察を最新の術語を用いて記述した。

ヨーロッパで生み出された術語が、現地において植民地の人々の信仰を表すのに用いられる。それは再び資料として本国に持ち帰られ、研究に使われる。ここでの議論に限定して言えば、本国の学者とは宗教学者であり、現地の情報を提供したのは民族学者であるともいえる。オランダにおいてこの両学問は非常に密接な関係にあったのである。

「アニミズム」という言葉の意味は、このような本国と植民地との知的交流から確立していった。その際、本来あらゆる宗教に共通する要素として考えられたアニミズムは、徐々に意味を変化させた。それはヨーロッパに止まらず、

独立ののちにはインドネシアにおける「アニミズム」の意味にも影響を与えたのではないだろうか。

そのような問題関心から、本論では、オランダの宗教学と民族学における「アニミズム」の意味に違いがどのように生じたかを精査し、いわゆる肘掛椅子の学者と、現地在住の行政官や宣教師という、立場の違いによって被植民者を見るまなざしにも違いが生じたことを明らかにする。

1. 宗教学と民族学の成立

この節ではオランダにおける宗教学と民族学の成立について概略を示すが、特に大学における講座の設置に注目される。というのは、大学への講座の設立は、宮崎が指摘するように、単に統治上ないし布教上の必要から知識の集成をするという、「他者」をいわば技術的にあつかうことから、知的対象として眺めることへの移行〔宮崎、1987：3〕と捉えられるからである。そのような移行が、宗教学と民族学において同時期に行われたことから、大学におけるそれぞれの講座がいかに成立したかを探ることは興味深い。

オランダにおける宗教学の歴史は、神学からの漸次的な解放と捉えられる。一般に、1876年の高等教育令が宗教学誕生の決定的要因であるとされ、それによって特定の教派に立脚した宗教教育が、公の場から排除されることとなった。ライデン大学においては1877年、神学部の中に「宗教史・宗教哲学講座」が誕生した。この高等教育令の発令に際しても、長く複雑な道のりがあったのだが、本論では宗教学の成立との関わりでのみ言及する¹。その「宗教史・宗教哲学講座」の初代教授はC・P・ティーレ (Tiele, Cornelis Petrus, 1830-1902) であった。

宗教学が神学部の中から成立していったように、民族学が講座として発足する以前に、民族学的な研究が皆無であったわけではない。たとえば、1778年には植民地バタヴィアに芸術科学協会が設立され、1851年には本国ハーグにおい

1 高等教育令の公布に関しては、国家と教会の分離が問題となっていた。旧体制においては国家が聖職者の養成に直接かかわっており、オランダ改革派教会はそれに関与していなかったが、このことが、自由主義政策導入後、国家と教会との組織的矛盾と考えられるようになったためである。発布までの議論の中心となったのは、新しい学問である「宗教学」の導入ではなく、伝統的な神学部の改革についてであった。〔Molendijk, 2005：73-7〕

て王立言語・地理・民族学研究所（現在は在ライデン）が発足している。[平野, 1962; 宮崎, 1987; Vermeulen and Kommers, 2002]

しかし、大学における講座に注目すると、民族学が正式に科目として成立したのは、先述の宗教史・宗教哲学講座が設置されたのと同じ1877年のことであった。民族学は、植民地行政官養成の講座を母体として始まっている。この講座はライデン大学に設置された「東インド諸島の地理学・民族学講座」であった。初代教授はP・J・フェト（Veth, Pieter Johannes, 1814-1895）、二代教授がG・A・ウィルケン（Wilken, George Alexander, 1847-1891）で、特にウィルケンは国際的にも有名な学者であった²。

モレンデックが指摘するように、これら二つの学問は非常に密接な関係にあった [Molendijk, 2005]。大学における成立時期を同じくしていることは、この二つの学問の親近性の表れとも捉えられるかもしれない。例えば、初期の民族学が植民地行政官養成に関わっていたことからわかるように、植民地インドネシアは政治的・経済的な意図をもって研究されていたわけだが、その成果はオランダの民族学の学問的な成熟を促した。そしてそこで蓄積された資料は、宗教学においても用いられたのである。もちろんその膨大な資料の蓄積は、イギリスなど、ヨーロッパの民族学および宗教学の研究材料として用いられ、それらにも実りもたらしたといえる。

宗教学において生み出された理論は、民族学における民族誌の記述や分析に利用された。本論で特に注目する「アニミズム」もそのひとつである。宗教学者の著作や民族学者（植民地行政官や宣教師をも含む）による民族誌において、「アニミズム」という術語が共通して見られたとしても、その意味や用いた意図はそれぞれ異なる。本論では、インドネシア研究の権威として国際的にもよく知られた二代教授G・A・ウィルケンと、彼の「アニミズム」説に影響を与えた宗教学者C・P・ティーレ、そしてウィルケンの説に異論を唱え、新たな「アニミズム」解釈を生みだし、オランダ宗教現象学ともかわりの深かったA・C・クロイトを取り上げ、そのアニミズムおよび靈魂概念を精査することによって、この三者にどのような共通点・そして違いがあるのか、そしてそれはなぜ生じたのかを考察する。

2 たとえば、J・G・フレーザー（Frazer, James George, 1854-1941）は、金枝篇初版の序文においてウィルケンの業績に言及している [Frazer, 1890: xiii]。

2. G・A・ウィルケンの東インドへのまなざし

2. 1 植民地行政官として

G・A・ウィルケン³は、先述したとおり民族学講座の教授を務めた人物である。それ以前にはインドネシアで植民地行政官を務め、現地からの情報を本国にもたす役割を果たしたのだが、従来の百科全書的な情報の記述に一定の方向性を与えたという点で、オランダの民族学に新たな時代の到来を告げたといえる。ウィルケンは、当時流行の進化論的枠組みをインドネシアの資料に適用した [Jaarsma and de Wolf, 1991b : 759] が、その進化論によって次のようなことを意味していた。

その説〔進化論〕によれば、いわゆる野蛮民族は、高い文化段階から、彼らが現在あるような低い段階へと墮落したのでも、何らかの原因によって野蛮になったのでもなく、まだ成長段階であるだけなのだ。彼らは墮落したのではなく、未開状態を示しているのである。いかに我々の始祖が教養をもっていたとしても、彼らは我々のような教養を示さないだろう。

[Wilken, (1885) 1912 : 88]

ウィルケンは、いわゆる野蛮な民族が成長段階にあり、したがって自分たちのような教養をしめすものではないと考えていた。ところで、この就任講演は「比較法律学に対する民族学研究の成果」と題されて行われている。法律学や、神学、数学や自然科学など、広い分野との関わりにおいて、民族学研究のもたらす所産について講演された。聴衆には、ライデン大学の理事、教授、そして学生たちがいた。講演の最後で、彼は特に民族学講座を受講するであろう学生達、すなわち未来の東インド役人に向かい、原住民のアダット (adat)⁴についての知識の重要性を説く。

3 ウィルケンは、1847年、ミナハッサ（北スラウェシ）で働くプロテスタントの宣教師の息子として、メナドに生まれた。彼は幼年時代を両親と過ごしたが、1859年にオランダに戻って教育を受ける。1868年に植民地行政官試験に合格し、その後12年間蘭領インドネシアで働いた。この間に、彼はいくつかインドネシア関する論文を書いている。ウィルケンは、オランダでの休暇中、ライデン大学で言語学に取り組み、論文を提出した。彼はライデン大学から1884年に博士号を受け、1885年に同大学の民族学教授に任命された [Jaarsma and de Wolf, 1991b : 759-60]。

4 慣習法のこと。ウィルケンの就任講演にもあるように、植民地支配においては現地の宗教とアダットを知ることが必要不可欠とされた。

あなた方の中で、主として政府職において司法官や行政官として東インドに赴こうとする人のみが、私の講義に出席するだろう。……無意識に原住民の気分を害してしまう不意な扱いによって、東インドにおける政府の利益を脅かすことのないように、宗教的観念と慣習の知識、法概念と制度の知識、風俗と思考様式の知識、一言でいえばその民族のアダットについての知識は、彼ら〔東インド役人〕にとって不可欠である。なぜなら、原住民は自分たちのアダットに非常な価値を置いているからである。

[Wilken, (1885) 1912 : 108]

ウィルケン、原住民のアダットを知ることが、植民地支配にとって有益であることを説く。その知識をもとにして、インドネシア人に接することで、彼らは役人に快く従うようになるというのである [Wilken, (1885) 1912 : 108]。

とはいえ、学生たちにアダットを学ばせる理由は、単に原住民の考え方を理解することによって、スムーズに植民地支配を運び、本国に利益をもたらすためだけではない。

一つの見事な労働環境を選んだ、東インドの職務のために学ぶ学生諸君よ！「東インドにおいて、偉大なことが行われる！」この名誉に飢えたバタヴィア創立者の言葉は、今でも通用する。あなたがたは、その「偉大なこと」を成し遂げるための助力を求められるだろう。あなたがそれに関与することによって、我々の法概念、我々の制度に原住民を調和させられるだろう。そしてその過程を経て、彼らを高い文明へと至らせることができるだろう。そのためには再び、アダットの知識が必要である。なぜならこの承認なくては、調和は困難だろうからである。そうして、あなたは支配者と被支配者の間の絆を強めるために貢献できるだろう。そしてこの方法で、あなたは美しいインスリンデを愛すべき祖国と見なすことができるだろう。[Wilken, (1885) 1912 : 109]

アダットの知識が必要なのは、インドネシア人を高い文明へと至らせるためでもある。アダットを知り、それに適した行動をまず役人がすることで、徐々に原住民を、「我々」ヨーロッパ人の考え方に調和させる。そしてその過程で、彼らを高い文明へと導くのが東インドの役人の仕事であるというのである。

実際にインドネシアにおいて行政官として働いていたウィルケン、このような見解をもって、インドネシア人たちの宗教や慣習を記述していたと考えら

れる。つまり、植民地を統治するための知識を提供するとともに、原住民を保護し導いていかななくてはならないという見解である。

2. 2 アニミズムの記述

ウィルケンはインドネシアの宗教にも、非常に関心を持っていた。オッセンブリュッヘンが編集し1912年に出版された全4巻の著作集のうちの第3巻には、「アニミズムとそれに関係する信仰の表れ」について書かれたものが集められており [Wilken, 1912], その他の3冊でも宗教研究の分野への寄与が見られる。彼が関心をもったインドネシアの宗教「アニミズム」は、後の民族誌の著者にも大きな影響を与えた⁵。

インドネシアの宗教に関するウィルケンの著作の中で大きな位置を占める『東インド諸島民のアニミズム』(*Het Animisme bij de Volken den Indischen Archipel*)の冒頭は次のように始まっている。

インド諸島の民族における宗教は、アニミズム (animisme) という新しい宗教学である。ティーレ学部長は次のように言う。「自然民族は、空想の産物であるものを現実と、客体を主体と、外の現象を自分自身の精神生活と混同する。そこから、彼が知覚するすべての動きと作用は、人格的で思考し、意思を持つ存在から生じるという誤った考えが生じる。アニミズムという一般的な名前で、呼ぶのが適した考察である。このアニミズムはそれ自体から二つに分かれる。……これはすべて宗教ではない。間違った認識から推論された未開—哲学的仮説であり、連結した全体の一部だが、真剣に考えられている。それは野蛮人の文明全体の基盤でもある。彼の全生命のように、彼の宗教もそれによって完全に定められている。自然宗教の二つの主な構成要素は、直接そこから生じる。すべてのものは生きていくという教義からフェティシズム (fetisisme), つまり生きており力がある存在として感覚的に知覚できる物体の崇拜が、そして靈魂が自由に動き、決まった肉体に結びついていないという教義からスピリティズム

5 たとえば、トールン (Toorn, Johannes Ludovicus van der, 1846–1909) の論文「ミナンパウ人におけるアニミズム」(1890) はウィルケンのアニミズム説を踏襲したものであったし、クロイトの『東インド諸島のアニミズム』(1906) はそれに異論を唱えたものであった。

(spiritisme), つまり死者の靈魂と、空中の目に見えない精靈の崇拝が生じる」⁶。

ここでいわれたことは、東インド諸島の諸民族にも当てはまる。かれらのもとの宗教もまた、アニミズムであり、それからフェティシズムとスピリティズムになる。[Wilken, (1884-5) 1912 : 3]

ウィルケンによれば、インド諸島の民族の宗教は「アニミズム」である。アニミズムとは、「知覚される動きや作用が人格的で思考し、意思を持つ存在〔＝靈魂〕から生じるという、誤った考え」のことであり、その靈魂への信念から「スピリティズム」と「フェティシズム」が生じるというのである。

ウィルケンはいくつかの膨大な例を用いて示したが、そのすべてが「靈魂」にかかわる信仰と実践である。したがって、アニミズムとはあらゆるものに靈魂が宿するという信仰のことであると解釈されているということができよう。このウィルケンの「アニミズム」は、ライデン大学宗教史・宗教哲学講座の教授であったC・P・ティーレによる『宗教史における自然宗教の位置』(*De Plaats van de Godsdiensten der Natuurvolken in de Godsdienstgeschiedenis*) から引用されたが、それはティーレが1873年にライデン大学の神学部教授に就任した際の就任講演であった。ウィルケンはティーレのアニミズムの記述を参考にし、インドネシアの宗教を考察した。

ところで、「アニミズム」という術語の生みの親であるタイラーがアニミズムを提唱した理由は、あらゆる信仰を「宗教」として扱うためであった。当時いわゆる未開人・野蛮人とされた植民地の人々に関する報告には、「彼らには宗教がない」としたものが多く、そうした態度に対して異論を唱えたのであった [Tylor, (1871) 1994]。自分とは異なる信仰を「宗教」としてとらえる姿勢は、ティーレにも見られる。特定の教派に立脚せずに宗教研究を行う「宗教史・宗教哲学講座」の設置は1877年であるが、彼の就任講演を考慮すると、それ以前からティーレはそのような視点をもって研究を行おうとしていたのではないだろうか。ウィルケンの「アニミズム」は、まさにティーレのこの講演から引用された。この講演と同様な記述は、ティーレの他の著作⁷にも見られ、彼が

6 ティーレ [Tiele, 1873 : 13-4] からの引用である。

7 たとえば『宗教史概論』(*Outlines of the History of Religion to the Spread of the Universal Religions*) や、ギフォード講義における講義録として発表された『宗教学概論』

一貫した姿勢で研究を行っていたと考えることができる。それらを参考にしてティーレの「アニミズム」を考察する。

3. C・P・ティーレによる宗教史と自然宗教

3. 1 宗教史における自然宗教の位置

ティーレは、先述の就任講演において「文明化した民族の宗教によって背後に押しやられた、これら黒人、黄色人、赤色人の宗教に、この数年間我々は関心があった」[Tiele, 1873 : 6] と述べる。以下に示されるが、ティーレがいわゆる自然民族の宗教に関心を持っていた理由は、それらが自分たちの宗教における問題に、光をもたらす可能性を信じたからであった。彼は「宗教史においてどのような位置が自然民族にふさわしいのか」[Tiele, 1873 : 6] と問う。そして当時議論されていた進化論と退化論に言及したのち、彼自身は結果的に進化論を受け入れると述べ、自然民族の宗教の位置を定めた [Tiele, 1873 : 12]。ティーレが進化論を受け入れた理由は、なぜ自然民族の宗教について関心があったのかに関連しているが、それはウィルケンのように植民地を支配したり原住民を導いたりするためではなく、自らの宗教を理解するためであった。例えば、ティーレは、キリスト教における迷信じみた観念や慣習はいかに説明できるのかという問いに関して、自然民族のアニミズム的見解のみがそれに光りをもたらすと述べている [Tiele, 1873 : 14-19]。すなわち、タイラーのいう「残存」の概念である。「より高いものを理解したいものは、より低いものから、宗教の進化を知ろうとするものは、野蛮人の宗教から始めなくてはならない」[Tiele, 1873 : 19] というように、高度に発達した「我々」の宗教を知るためには、まず野蛮人の宗教を知る必要がある。しかし、野蛮人の宗教の知識、最初の段階の基礎的知識は必要であるとしても、ティーレは知識それ自体には、それほど意味がないと考える。

自然宗教の知識は、宗教の進化史の必要な基盤である。……基盤は、それ自体としてはそれほど意味がないように、その知識の価値は、野蛮人の宗教とより高い宗教の関係にある。[Tiele, 1873 : 25]

ティーレの自然宗教に対する関心はあくまで、より高位の宗教を思索するためのものであった。自然宗教から進化を経て、高位の宗教が生じることが理解されて初めて、宗教の本質と起源を研究する可能性が見えてくる。

自然と闘い、強制し、呪術的な力によってそれを支配しようと試みる、自分勝手に独断的、利己的で不道德な自然宗教から、幾多の進化の時を経てついに、必然的かつ道德的世界秩序へ自由意思で従い、道德と親しい、いやそれと溶け合うほどの、自己を放棄し、同一の志向を持つ宗教が生じることが理解される。その時、そうその時ようやく、我々はこの比較人類学的・歴史的研究の結論を述べ、研究の心理学的部分に着手し、人間を宗教的個人として我々の研究対象とし、宗教の正当性を問い、そのために人間の本質からその本質と起源を突き止めようとするのだ [Tiele, 1873 : 26]

ティーレがこのように、二つの宗教的な進化の段階という見解をもっていたのは、これらに共通の要素があると考えていたからである。それが宗教の本質である。それを問う「何が宗教なのか」[Tiele, 1873 : 30] という問いは、次のようにして答えられるとティーレは述べる。

ここで、すべての宗教の類が研究され、あらゆる宗教の発展段階が相互に比較され、比較から変化の形態において不変の本質であるものを明らかにする前には、決定的な答えは出せない [Tiele, 1873 : 31]

すなわち、宗教は、形態は変化すれども、不変の本質が存在する。形態とはキリスト教や自然宗教であり、「何が宗教なのか」に対する答えは、まさにその本質ということになろう。

3. 2 アニミズムと宗教

それではティーレにおいて、「宗教」と「アニミズム」はどのような関係にあったのだろうか。

ティーレは宗教史において、異なる二つの発展段階、すなわち自然宗教と倫理宗教を想定した。その二つの段階という見解は就任講演においても見られたが、後により明確に表現している [Tiele, 1873, (1896) 1979]。しかし、ティーレによれば、宗教の形態は、常にその本質であるわけではない [Tiele, 1873 : 31, (1896) 1979 : 40]。

ティーレはギフォード講演において宗教史を講義するに際し、もっとも低い自然宗教から始めており、アニミズムに言及する。

もし我々がそれ〔我々の知るもっとも低い自然宗教〕を、一般的術語を用いてアニミズム的というとき、それは、アニミズムを宗教とみなすのではなく、単に宗教が未開人の生全体であるように、宗教がアニミズムによって支配されているからである。[Tiele, (1896) 1979 : 68]

ティーレによれば、アニミズムは宗教ではなく、宗教を支配しているものであるという。その「アニミズム」という術語はタイラーから借用したものだというのが [Tiele, (1896) 1979 : 68]、ティーレはタイラーとは全く異なる見解を持った。タイラーによるアニミズムの定義は「霊的存在への信仰」で、宗教の最小定義である [Tylor, (1871) 1994, I : 383]。しかしティーレは、アニミズムは宗教ではなく、自然民族による誤った考えであるとした。そして最も低い自然宗教は、宗教がアニミズムによって支配されているとき、現れる形態であると捉えた。アニミズムと宗教の関係について、ティーレは次のように述べている。

宗教の起源についての問題は、歴史的な性質でも考古学的な性質でもなく純粋に心理学的なものであり、最古の宗教形態についての研究とは完全に異なるものである。もしこの形態をアニミズム的であるというなら、我々は決して、宗教はアニミズムから生じたのではなく、単にその最初の表れがアニミズムによって支配されており、それは未開人にとって自然な思考形態であるというのみである。[Tiele, (1896) 1979 : 71]

宗教の起源についての問題は心理学的なものである。アニミズムは思考形態であるため、ティーレはアニミズムを宗教と同一視しない。タイラーとティーレの見解の違いは、そこにもっとも顕著に表れている。主知主義的といわれるタイラーは、思考形態である「アニミズム」を宗教と見なす。ティーレは、その問題を心理学的に考えようとしており、主情主義的であるといえる。もちろん彼らに相違があるとしても、両者ともに宗教の理解を目指した点で共通している。タイラーは、あらゆる宗教に共通する要素アニミズムを想定することにより、その理解を可能にした。ティーレは宗教の本質を想定し、その外部への現れ＝形態を決定するのが思考形態であるとすることによって、タイラーと同様、あらゆる信仰を同じ「宗教」としてとらえる可能性が生じた。

ところで、ウィルケンがインドネシアのアニミズムを論じる際にはティーレを引用したが、E・B・タイラーの影響が顕著にみられる〔Jaarsma and de Wolf, 1991b: 759〕という指摘がある。確かに直接的には、ウィルケンはティーレを踏襲したが、タイラーと同様、宗教とアニミズムを同一視する点、すなわち思考形態そのものを宗教と見なす点で主知主義的である。それに対しティーレは思考形態は宗教の現れを規定するにすぎず、その不変の本質を想定する点で、後のオランダ宗教現象学に通じる立場と考えられよう。そしてその流れは、いかに扱うクロイトに助言を与えた、シャントピー・ド・ラ・ソーセイ (Chantepie de la Saussaye, Daniel, 1818-1874) に受け継がれる。

しかし、タイラーやティーレとウィルケンの間には大きな相違がある。前者があらゆる宗教を等しく扱おうとしたのに対し、後者はむしろ差異を強調した。インドネシア人の宗教をアニミズムとし、低い段階であると捉え、自分たちと隔たった宗教であるとした。それを理解することは、円滑な植民地支配および本国の利益につながる。そしてそのような劣った彼らは、我々によって高い文明へと導かれるべきであると考えたのである。

4. 「アニミズム」に表れる差異

4. 1 A・C・クロイトの「アニミズム」

この章では、ウィルケンの「アニミズム」説に修正を加え、後のオランダ宗教現象学とも関連のあるA・C・クロイト⁸を取り上げる。

クロイトの『東インド諸島のアニミズム』(*Het Animisme in den Indischen Archipel*)は1906年に出版された。この書の目的はウィルケンの説の修正である〔Kruijt, 1906〕が、その修正は特に靈魂概念に関連して行われた。

-
- 8 クロイトは1869年に、インドネシアのスラバヤでプロテスタント宣教師の息子として生まれた。学校に通うために1884年にオランダにもどり、ミッションカレッジに入学する。その後、1890年オランダ宣教師会によって、スラウェシ島中央部のトラジャ族の間で布教することになり、ボソに派遣される。1892年にボソに定住。1895年にはN・アドリアニと知り合い、彼の死まで共に仕事をした。1932年にオランダに帰国している〔Jaarsma and de Wolf, 1991a〕。

オランダ宗教現象学との関わりについては、クロイトの提案した「霊質」の概念は、非人格的な力として考えられ、ファン・デル・レーウ (Leeuw, Gerardus van der, 1890-1950) や、ゼーデルブローム (Söderblom, Lars Olof Jonathan Nathan, 1866-1931) などの著作にも多く引用されることとなった。

クロイトは次のように述べている。

インド諸島の様々な民族における、靈魂に関する観念を厳密に検討すると、次のようなことがわかる。つまりインドネシア人たちは、我々が「靈魂」という言葉で描写できる二つの名称を、かつて知っていたということである。[Kruijt, 1906 : 1]

インド諸島の諸民族においては、二種類のいわゆる「靈魂」が見出せる。クロイトによれば、双方の靈魂は大変に異なっており、このことを視野に収めないことが、アニミズムに関するより明確な観念を作り出すことができなかった原因であるという [Kruijt, 1906 : 1]。

クロイトはそれらに、新たに「靈質」(zielstof)⁹と「靈魂」(ziel)と名づけ、従来一つのものとして捉えられてきた靈魂を区別した。「靈質」は、「完全に地上的生活に関係し」、「日常生活において役割を果たす、自然すべてを満たす生命力」[Kruijt, 1906 : 1]である。それに対して「靈魂」は、「人間の死後に初めて語られ」[Kruijt, 1906 : 1]、「死後も靈的に生き続ける靈的な人間」[Kruijt, 1906 : 2]である。

クロイトは、これらの観念によって、インドネシア人の宗教を説明する。

インドネシアの宗教的観念に関する研究によって、2つの流れが見出される。ひとつは、本来的なアニミズムの観念、全自然を満たす靈質の観念である。その観念はそれが人格化された際にも、なお非人格的な性質をそのうちにとどめ、死後再び他の物体に生命を与える(輪廻)。いまひとつは、スピリティズムの観念、来世において自立的に生き続ける靈魂の観念であり、それは恐れられ、それゆえに崇拝される。[Kruijt, 1906 : 4]

クロイトによれば、二つの宗教的観念のうち、靈質の観念がアニミズムであり、靈魂の観念がスピリティズムである。これらの観念の表れは、共同体の状態と密接なかかわりをもつ。たとえば、クロイトは、「共産主義的な集団のなかで生きているときには」、「人格的に存続する靈魂が鮮明でない」[Kruijt,

9 この「靈質」という言葉は、レイデン大学宗教学講座の第二代教授であったシャントピー・ド・ラ・ソーセイの勧めによるとクロイトは述べている [Kruijt, 1906 : 2]。しかし、後に彼はオッセンブリュッヘン (Ossenbruggen, Frederik Daniel Eduard van, 1869-1950) の論文に影響をうけ、「靈質」という言葉を訂正している。そこにはプレアニミズム説の影響もある。

1906 : 3] と述べるように、靈魂の觀念は人がより個人を意識するようになった社会のものであるとされる。また靈質に関しても、非人格的な靈質と人格的な靈質が存在するにしろ、それは共同体の状態によるとする。

まだ共同的な生活に強く縛られているような民族、共同体に個性が完全に埋没しているような人々においては、靈質は、全てに生氣を付与する生命力という、その固有の性質をなお完全に保っていた。[Kruijt, 1906 : 2]

人が自分自身を意識し、より個人的になり、行動するようになればなるほど、ますます彼の觀念において靈質は人格的な性質を持つようになる。

[Kruijt, 1906 : 2]

クロイトによる、共同体の状態と靈質および靈魂の人格性・非人格性との関係についての考察を考慮すると、本来非人格的である靈質の觀念、すなわちアニミズムは、もっとも低い初期の段階の社会に属しているものであるといえる。

4. 2 キリシト教と自然宗教

クロイトはアニミズムに関して、客観的な記述をしようとしていたが[Kruijt, 1906 : IX], キリシト教徒としての立場が表れる箇所もある。クロイトはトラジャ人のもとで、長い年月にわたり、布教をおこなっていた。彼は、トラジャ人の思考を把握することによって、彼らをキリシト教に導くことができると考えていた。それは宣教師だけでなく、東インドで仕事をしている人にとっても、非常に価値あることであるという。

私自身はセレベスで宣教師として働いており、ますますトラジャ人の思考に染まっている。それを通して、私はその民族に説教を理解させ、希望を与える福音をもたらすことができる。[Kruijt, 1906 : VII]

役人や宣教師、どんな職であれ原住民のあいだで仕事をする人にとって、その人々の思考様式と靈的觀念になじむことが、いかに価値あることであるかを、ここで私が説明する必要はない。[Kruijt, 1906 : VII]

しかしクロイトは、植民地支配や布教にとって、原住民の思考様式を把握することは非常に重要なことではあるが、自分たちが彼らを理解することは不可能であると考えていたようである。クロイトは「アニミズムにおいては、退化も進化も正しいとみなされている」[Kruijt, 1906 : VIII] というように、いわゆる自然宗教を取り巻く当時の議論に触れている。しかしそれは、クロイトにとっ

ては机上の議論にすぎなかったのではないだろうか。クロイトは序文を次のような言葉で締めくくっている。

キリスト教がこの自然宗教から発展したと考えられたとしても、自然民族がその生活や行動のなかで知るものは、私にとって常に謎のままである。

私にとっては、キリスト教こそが神の啓示である。[Kruijt, 1906 : VIII]

クロイト自身の信仰にとって、進化論や退化論といった議論はほとんど意味を持っていなかったようである。彼はアニミズムを客観的に示すことはできたとしても、自然民族の理解までには至らなかったのではないだろうか。

ところで、クロイトによる「霊質」概念の提案に関しても、ウィルケンとティーレのような学説史的立場の相違が想起される。ウィルケンを批判したクロイトは、思考形態が宗教であるとは考えていなかったのではないだろうか。「霊質」という術語もソーセイの助言によるものであり、クロイトには非人格的な力に宗教の源泉を見出した、オランダ宗教現象学の影響を見ることができる。ゆえにクロイトは主情主義的であり、思考とは別の感情に宗教の源泉を見出していたのではないだろうか。

しかしクロイトは、アニミズムは低い段階の信仰で、原住民はキリスト教によって導かれるべきだと考えた。それは彼らの思考形式を把握することで達成されうが、クロイトにとって彼らは常に謎で、理解不可能であった。彼にとっては「キリスト教こそ神の啓示である」のみなのである。

むすび

以上、ウィルケン、ティーレ、クロイトの「アニミズム」について精査した。学説史的(主知主義／主情主義)には立場を同じくしていたとしても、ヨーロッパに住まい研究を行う学者と、実際に植民地に赴き、現地で仕事をしながら研究を行ったものとの差異は、確実に存在していた。本国と植民地との物理的な距離は、心理的な距離と、実際には反比例していたのである。本国の学者があらゆる民族に共通する宗教の存在を想定し、理解可能であると捉えようと努力していたのに対し、植民地で働く行政官や宣教師などはむしろ、その現地での経験によって、自分たちヨーロッパ人と植民地インドネシアの人々との差異を大きく感じる事となったのである。

引用文献

- Frazer, J. G. 1890, *The Golden Bough : a Study in Comparative Religion*, London : Macmillan.
- 平野高国, 1962, 「オランダ民族学史要」『民族学研究』26 (3) : 206-17。
- Jaarma, S. R. and de Wolf, J. J., 1991a, “Kruyt, A. C. (Albertus Christiaan),” Winters, Christopher ed., *International Dictionary of Anthropologists*, New York : Garland, 367-368.
- , 1991b, “Wilken, G. A. (George Alexander),” Winters, Christopher ed., *International Dictionary of Anthropologists*, New York : Garland, 759-60.
- Kinderen, T. H. der, 1892, “Levensbericht van Dr. G. A. Wilken,” *Bijdragen van het Koninklijk Instituut voor de Taal-, Land-, en Volkenkunde van Nderlansch Indië*, 5 (7) : 139-56.
- Kruijt, A. C., 1906, *Het Animisme in den Indischen Archipel*, 's-Gravenhage : M. Nijhoff.
- 宮崎恒二, 1987, 「レイデン学派の構造人類学」『日蘭学会会誌』11 (2) : 1-10。
- Molendijk, Arie. L., 2005, *The Emergence of the Science of Religion in the Netherlands*, Leiden : Brill.
- Shefold, R., 2002, “Indonesian Studies and Cultural Anthropology in Leiden : From Encyclopedism to Field of Anthropological Study,” Vermeulen, H. and Kommers, J. ed., *Tales from Academia : History of Anthropology in the Netherlands*, Saarbrücken : Verl. Für Entwicklungspolitik, 69-93.
- Tiele, C. P., 1873, *De Plaats van de Godsdiensten der Natuervolken in de Godsdienstgeschiedenis*, Amsterdam : P. N. van Kampen & Zoon
- , (1877) 1905, *Outlines of the History of Religion to the Spread of the Universal Religions*, London : K. Paul, Trench, Trubner.
- , (1896) 1979, *Elements of the Science of Religion*, Edinburgh : Blackwood.
- Toorn, J. L. van der, 1890, “Het Animisme bij den Minangkabauer der Padangsche Bovenlanden,” *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch Indië* 39 : 48-104.
- Tylor, E. B., (1871) 1994, *Primitive Culture : Researches into the Development of*

Mythology, Philosophy, Religion, Art, and Custom vol.1, 2, London : Routledge/Thoemmes.

Vermeulen, H. and Kommers, J., 2002, "Introduction : Histories of Anthropology in the Netherlands," Vermeulen, H. and Kommers, J. ed., *Tales from Academia : History of Anthropology in the Netherlands*, Saarbrücken : Verl. Für Entwicklungspolitik, 1-63.

Wilken, G. A., (1884-5) 1912, "Het Animisme bij de Volken den Indischen Archipel," Ossenbruggen, F. D. E. van ed., 1912, *De Verspreide Geschriften van Prof. Dr. G. A. Wilken*, vol.3, Semarang : G. C. T. van Dorp, 1-287.

——, (1885) 1912, "De Vrucht van de Beoefening der Ethnologie voor de Vergelijkende Rechtswetenschap," Ossenbruggen, F. D. E. van ed., 1912, *De Verspreide Geschriften van Prof. Dr. G. A. Wilken*, vol.2, Semarang : G. C. T. van Dorp, 83-110.

〈キーワード〉アニミズム, 蘭領東インド, 主知主義, 主情主義, オランダ宗教現象学

The Science of Religion and Ethnology in the Netherlands.

Risa AIZAWA

It is worth to show the different ways “animism” was used, in the framework of the science of religion and ethnology, during the late 19th and early 20th century Netherlands. This is because such uses might be connected with the way “animism” is utilized in present day Indonesia. In the Indonesian context, “animism” implies primitiveness, backwardness, and sometimes even communism. That causes people regarded as “animists” to be treated with disdain still today.

Theories such as “animism” were formed through the intellectual exchange between scientists of religion located in Europe and ethnologists located in the colonies, especially in Dutch East Indies. Although the two fields had a close relation, there were significant differences between them in terms of doctrinal standpoints and views of the primitives.

In this paper, in order to bring that into light, I will take a closer look at the works of G. A. Wilken, C. P. Tiele and A. C. Kruijt, focusing especially on the particular use each of them make of the word “animism”. We will notice their schools of thought, and how being distant from the colony influenced them.